

軍事史学

第54巻 第1号

巻頭言

近代日本軍の建設者

徳川幕府を倒した明治新政府は、新しい近代軍の創設に着手したが、それは対外防衛よりも政権を安定化し治安を維持するという対内防衛を重視した政府直属軍であった。その編成にあたり、大久保利通などの藩兵主義か大村益次郎などの反藩兵主義かの対立があったが、その折衷策を探り、まず諸藩兵をもって御親兵・鎮台兵を編成し、それを基盤に新しい徴兵制軍隊に編成していった。

また、島国日本にとって対外防衛を考えた場合、理論的には海軍を充実して日本近海の制海権を確保すれば、外国の侵略を防止できるのであるが、当時このような海軍の整備は財政的に不可能であり、さらに海軍を優先整備すれば、陸軍の整備が後回しになり、結局既存の封建的諸藩兵を温存し、新しい政府直属軍の編成が困難になるのであった。従ってまず陸軍を優先整備すれば、少なくとも敷居の内だけは守ることができるとして、陸軍を優先し、徴兵制軍隊を整備していった。

その後、西南戦争という国内的な一大危機を、この徴兵制軍隊で乗り切り、国内が安定化するとともに、本来の対外防衛を重視する軍隊に転換していった。陸軍は、治安維持を重視した鎮台制から、諸兵種を編合した機動性のある師団制に改編していった。海軍は、軍艦の計画的建造を開始したが、軍艦の建造をめぐる、甲鉄艦を中心とする外洋艦隊か、海防艦と水雷艇を中心とした海防艦隊かという意見が対立したすえ、財政事情を勘案して両者の折衷案で艦隊を整備し、国土防衛に当たることになった。かくして日清・日露戦争を戦い、陸海軍とも近代軍としての体制が確立したのである。

この間におけるこの近代軍建設の功労者としては、陸軍では、大村益次郎・山縣有朋・大山巖・桂太郎・川上操六・児玉源太郎・寺内正毅などがあげられ、その他兵術では田村怡与造、軍医制度では石黒忠憲、經理制度では野田豁通、兵器関係では原田一道・大築尚志・有坂成章などがあげられるが、最も中心的役割を果たしたのは、山縣・桂・川上であると考えられる。海軍では、川村純義・仁礼景範・西郷従道・山本権兵衛・斎藤実などであり、兵術では柴山矢八・島村速雄・山屋他人・秋山真之、軍医では高木兼寛、兵器関係では赤松則良・山内万寿治であり、中心的役割を果たしたのは、川村・西郷・山本と考える。当時、これらの人々の、理想と現実との間での苦悩は大変なものであったろう。

(原剛)